

## 寄書

中等教員受験者諸君の爲め

(に再び)

駿河灣頭にて 紫 生

この度は本試験の状況を御報告申上候

第廿一回鉛筆畫用器畫科本試験問題

△用畫器問題(十一月九日施行)

右四時間

△鉛筆畫實技試験問題(十一月十

二日施行)

一、兩畫面に傾斜せる任意の平面上に畫きたる正五角形の立面圖及平面圖を畫け

モデル臺上に十四五才の少年を着衣にて端座せしめ之の半身像を寫生せしむ(但し用紙は畫學紙四つ切)以上二時間

△水彩畫實技試験問題(十一月十

二日施行)

二、第一圖を以て與へたる正八角錐と正四角錐との相貫體の圖を完成せよ(圖は底面大にして高さ低き正八角錐を底面小にして高さ高き正四角錐の貫けるもの)

ぼけ一個、栗の實二個、樽柿一個を各自に與へ隨意に位置を作りて寫生せしむ(但し用紙はワットマン四つ切)以上二時間

△圖按畫實技試験問題(十一月十

二日施行)

三、第二圖を二倍し平面三角形が平面長方形に投ずる影及兩平面形が俱に圖面に投ずる影を見出せ(圖は空間に於て兩畫面に傾斜せる長方形と不正三角形との二平面形の兩投影なり)

大き六寸四方の正方形内に寄木細工原案として床板用の模様を畫かしむ(但し着色にして其色彩は木地の實色を模すべきと)

四、平面畫に接し且つ相互に接する各其半徑を異にせる三個の球の投影圖を作れ

以上二時間

圖を求む

△教授法試験問題(十一月十八日

施行)

教授法試験に限りて第一高等學校製圖室にて行へり、先づ正面に教壇、ボールドを供へ其前に三方に別れて兒島憲之、白濱徹、渡邊文三郎の三試験官あり、いろは順にて一人一人控所より呼ぶ、試験室に入るや渡邊氏先づ口を開き「其ボールドにチヨークにて君の最も好める形式の花瓶三種の正面圖を畫け」と云ふ續いて同氏「案内用の指させる手を畫け」と命づ之れ黑板畫の試験と知るべし次に白濱氏徐ろに口を開いて問ふ「現今我國にては圖畫教育の改良と云ふ事に就て輿論大に沸騰し來れり此問題に就て君は如何なる意見を抱かるや君の理想とする圖畫教育の方針を語れ」と之に答へ終るや更に兒島氏發問して曰ふ「其處のボールドにある問題を學生に教授する積りにて解り易く説明せよと(ボールドには「兩畫面に傾斜せる直線の投影ありこの實長を求むる法」と書しこの側に此問題の投影圖を示せり)次に尙一問を發して曰く「水平、面と直立面との外投影圖を説明する場合に必要に應じて尙他に平面を設けるとあり以上、

本年度に於ける文部省檢定試験鉛筆畫用器

畫科受験者は全國に於ける總員は不明に候  
へ共東京府廳を経て受けたるものは最初十九名ありこの内豫備試験に合格せしもの四名有之更に今回の本試験に全然最後の勝利を克ち得しものは僅々二名に減じ申候以て全國一般の景氣を察知するに足るものありと存じ候

左に今後受験せんとする諸君の爲めに聊か御注意申上候

△中學師範卒業及小學正教育の資格なきものは明年(四十一年)限り受験の資格を失ひ申候、依てこの資格なき人は御奮發の上明年中に合格可然若し然らざれば終に永遠に好機を逸する譯に候

△たとへ前述の中師卒業の資格ある人と雖四十二年度よりは實技試験に鉛筆毛筆合併ならでは受験する不能、斯くては繁雜困難の倍加するは争はれぬ事實に候  
△願書差出メ切期日は今年は六月十五日までに候、毎年願書メ切期日に遅れて失策する人あり御用心なさるべく候

△寄留先きにて受験せんとする人は受験地に寄留するを要し候間早く寄留手續をす  
るが安全に候

△中學師範等にて相當平面及立體幾何の素養ある人は用器畫の準備としては六ヶ月にて充分と存じ候、其他の人ならば専心八ヶ月位は要し申候

△實技試験は水彩畫研究所にて一ケ年も研究せば大手を振つて合格疑ひなく候

△教授法參考書としては白濱徵氏圖畫教授法と云ふ書物が最も適當と存じ候

△文部省の檢定試験と云ふものは左程難しきものにはあらず、只徒らに文部省の名に振へ上ることなく、試験場を研究所の控所位に考へてウンと大膽に落着きて活動することが受験の最要秘決と存じ候、尙一ツは時間のことに候、何れの科目も

時間は甚だ不足にして、鉛筆や水彩の寫生を二時間づゝにてやらせる如きは隨分無理の骨頂と可申候、この時間を巧みに便用するが緊要に候、決して一分たりとも無駄な時間を消費せぬ様なさるべく候

尙云ふべき多くを余し候へ共「みずゑ」編輯子より御目玉を頂戴致し候に付これにて筆を收め申候尙御尋ねの議も有之候は、小生の知れる凡てを御回答可申其節は返信用切手三錢封入左記の處へ宛て御賜信願上候  
静岡縣榛原中學校内 藤田紫舟宛

## 始めての寫生

T 生

十日間の強請で今日漸く繪道具一通りを買つて貰つて今生れて始めての戶外寫生に出た所だ、然し程よい所がない、どんなに行

つてもないもう十二時といふに、

致方がないから辨當を食つて或る一景に向つて筆を染めた、遠景は七重八重壘みかけた様な山と森で手前に道がある、其先は直ぐ廣い川と石川原で、川向ふには、村落點々といふた様な實に好い景色だ、自分の力ではとても覺束ないといふ事は更に悟らない、

此時一番氣にして居たのは人の來る事で、弟に番をさせて居るけれど尙心配でならず、絶へず後に氣をつけて見られぬ様にとめた。

ワットマン、といふ紙に向つて居るので書き損じてはならぬ、殊に始めてだから誰にでも賞められたいと思つて出来る丈け念を入れたがどうしても手が振るうて畫けないこんな事なるものかと思つて、自分で自分に鞭打つて尙續けたそして此の中にも『みづゑ』は幾度か彼是と操られて少なからぬ注意と、方法を與へる。

幸に人の來ぬのはよいが、寒いのに閉口した、

四時といふ時に完成といふ事になつた、自分で見ても道と川の判別を爲し兼ねるといふ代物がだ其時の愉快だつた事は實に例へ様が無い位